

長野県下に震央のある被害地震で史料数の少ない地震についての考察

渡邊健 (大和探査)・西村功 (東京電力)・宇佐美龍夫

Study on earthquakes in Nagano Pref.

which accompanied by damages and are poor in historical documents.

Takeshi WATANABE

Daiwa Exploration & Consulting Co., 2-8-22 Nakameguro Meguro-ku Tokyo

Isao NISIMURA

Tokyo Electric Power Co., 1-1-3 Uchisaiwai-cho Chiyoda-ku Tokyo

Tatsuo USAMI

Nara Nissei Eden-no-Sono, 1-8-1 Takatsukadai Kawai-cho Nara-Pref.

Abstract: 19 disastrous historical earthquakes in Nagano Pref. with few (less than 20) documents are reconsidered. Especially, the ascertainity of earthquake and damages is studied. For most earthquakes, the results are same as believed before. But, earthquake which has been thought as occurred in 1818 is proved to have occurred in 1466.

§ 1. 長野県の歴史被害地震概要

研究の目的: 長野県の地震というと、1847 年善光寺地震・1718 年遠山川の地震・1858 年大町付近の地震、最近では長野県西部地震などが有名であるが、これ以外にも昔から大きな地震があった。1984 年長野県西部地震は実際には局所的な地震で、この程度の地震は人口の少なかった昔には記録されたかどうか疑わしい。このような事情から、この研究は、史料の少ない地震について史料を再検討して、それらの地震の存否を判定し、その中でも大地震の混っている可能性もあることを強調して注意を喚起するものである。しかしこれらの地震の史料は少ないので、存否を十分に判定することは困難であり、史料が他にないかどうか地元の方々にも史料の調査に参加していただくこともお願いしたい。

範囲の限定: 今回の調査は長野県に震源があると推定される地震に限定することにし、長野県に被害があっても県外に震源が

あると推定される地震は割愛した。

長野県下で発生したと思われる歴史被害地震の史料数一覧表を作成して第 1 表に示した。この表は『増訂大日本地震史料、第 1 巻』(1941)以後、『新収日本地震史料、続補遺』(1994)までの史料(参考文献で ‡ 印のあるもの)及び『日本の歴史地震史料、拾遺』(1999)までの史料を用いて作成したものである。この表の第 1, 2 列には和暦と西暦(グレゴリオ暦)の地震年月日を示し、第 3 列には現時点で収録されている各地震の史料数を記載した。史料がもっとも多いのは 1847 年善光寺地震で 765 編、あと 1718 年遠山川の地震の 75 編、1858 年大町地震の 51 編と続いている。一方、史料の少ない地震は 1 編のみが 7 地震もある。第 4 列は、『日本被害地震総覧、増補改訂版 416-1995』(1996)〔以下『新編総覧』という〕で使用されている地震番号を示した。同書で無番号のものは「- - -」と示し、同書に採用されていない地震は「不採用」と記載した。

第 5 列は今回の研究の検討対象とした史料数が 20 以下の地震だけに年代順に番号を付したものである。史料数が 21 以上の地震は今回の研究対象から外した。

これらの地震について史料集の地震記事だけでなく、それらの原史料・関係資料を収集した。それらのうち主要な史料を地震ごとにまとめ本稿の末尾に示した。史料のうち「(参考)」と記載したものは、別の日付けの地震で関連記事のある史料である。

第 1 表 長野県下で起った歴史被害地震の表 (検討前)

和 暦	グレゴリオ暦	史料数	番号	検討番号
天平宝字 6/5/9	762/6/9	3	9	①
承和 8/	841/	2	14	②
仁和 3/7/30	887/8/26	16	---	③
元中の末	1390-1392	1	---	④
永享 4/9/	1432/	1	---	⑤
寛永 4/9/14	1627/10/22	1	---	⑥
宝永 4/9/2	1707/9/27	1	---	⑦
正徳 4/3/15	1714/4/28	23	159	
享保 3/7/26	1718/8/22	75	163	
享保 3/9/12	1718/10/5	1	---	⑧
享保 10/7/7	1725/8/14	29	169	
元文 2/閏 11/13	1738/1/3	8	178-1	⑨
寛延 1/7/26	1748/8/19	1	---	⑩
寛延 3/6/23	1750/7/26	1	不採用	⑪
寛政 3/6/23	1791/7/23	8	212-1	⑫
寛政 3/8/16	1791/9/13	4	---	⑬
文政 1/	1818/	2	不採用	⑭
天保 4/9/26	1833/11/7	7	不採用	⑮
天保 12/10/27	1841/12/9	3	243-2	⑯
弘化 4/3/24	1847/5/8	765	248	
嘉永 1/2/28	1848/4/1	10	251-2	⑰
嘉永 5/12/17	1853/1/26	12	252	⑱
安政 5/3/10	1858/4/23	51	271	
安政 5/4/5	1858/5/17	1	272	⑲

注：第 1 列は和暦による地震年月日

第 2 列はグレゴリオ暦による地震年月日

第 3 列は現在までに収集されている史料数

第 4 列は新編総覧の地震番号

第 5 列は本稿で検討した地震につけた番号である。

§ 2. 史料の少ない地震ごとの検討結果

今回は、以上のような観点から、第 1 表の第 5 列に番号を付してある 19 地震(史料数が 20 編未満)について調査検討した結果を順に説明する。

① 天平宝字六年五月九日 (762/6/9)、美濃飛騨信濃の地震

収集されている史料は『続日本紀』『越後年代記』『善光寺縁起』の 3 編で、『続日本

紀』は信頼性の高い史料であるが他の 2 編の信頼性はやや低い。『続日本紀』によれば、詳細は不明であるが「美濃飛騨信濃等国地震、賜被損害者穀 2 石」と記載されており、被害地震があったことは間違いない。震央位置としては、上記三つの国の区域の中心付近と考えられている。

② 承和八年 (841)、松本の地震

収集されている史料は『続日本後紀』『千葉県野田地方庶民災害年表』の 2 編で、『続日本後紀』の信頼性が高い。これによれば「信濃国言、地震、其声如雷、一夜間凡十四度、墻屋倒頽、公私共損」と記載され、信濃の国司からの公式報告による被害地震であることは確かで、その震央は、当時の国府の松本と考えられている。『千葉県野田地方庶民災害年表』の記載は『続日本後紀』の転載であり、月日として二月十三日としているが、これは信濃国が報告した月日と考えられる。

③ 仁和三年七月三十日 (887/8/26)、信濃北部の地震

この地震は『新編総覧』によれば、五畿七道の地震と信濃の地震が同じ七月三十日に起こったことになっており、地震史料集でも同じ個所に収録されている。第 1 表の第 3 列に示したこの地震の史料数は兩地震の合計史料数で、このうち信濃の被害の記事(大山崩れ、巨河溢れなど)が含まれる史料は『越後年代記』『類聚三代格』『扶桑略記』『日本紀略』等である。『類聚三代格』は信頼性の高い史料であるが、これを見ると、五畿七道の地震は去年七月三十日と記載し、信濃の被害は今年八月と記載し、最後に仁和四年五月廿八日と記載日らしいものが記載されている。従って信濃の被害は仁和四年五月八日ということになる。『日本紀略』でも五月八日となっており、『扶桑略記』では七月三十日となっているが注で疑問が加えられている。いずれにしても

両被害の存在は確かである。『日本三代実録』では七月三十日の条には信濃の記事はないが、本書は仁和三年八月廿六日に天皇崩御のため終了しており、仁和四年の信濃の記事は無い。

また、『類聚三代格』の記事では仁和四年五月八日は「山頽河溢」による被害で、地震の文字は無い。これは信頼性の高い史料の記載であるので、この被害は地震と関係ない山崩れの被害と考えることもできる。

しかし、『新収日本地震史料、補遺』（1989）に収録されている『太田の歴史』（1973）（現在、飯山市）の原文には高橋家の過去帳の現代語訳文で「大雨と大地震で山が崩れ、峯の池と山がおし出し」と記載され、同じ頁に原史料の写真版が掲載されているので、それを読むと次のように書かれている。家譜の形式で、「高橋尚好、母中曾根良次女、仁和二年（886）十一月九日出生、同三年丁未秋七月三十日大雨大地震、当国大山崩高嶺之池水山河共溢流、在家大半存亡溺死人不知其数、延長三年（925）乙酉春二月右之事依父命記爰者也、同年夏四月娶小菅吉正女、当年冬十月改書先祖記録也、永観二年（984）甲申二月五日卒、行年九十九歳」となっており、『太田村史』（1954）にもこれが記載されている。これらによれば、信濃の被害は、上述の五畿七道の中に信濃も含まれ、同日に地震及び山崩れがあったことになる。この史料の信頼性については、地元の方々のご意見を伺いたい。

この他に、『松原湖沼群の生成年代の考察（1965）』という論文が収集史料中にあり、仁和4年の山崩れが生成原因かと記載されている。また『小海町志、川東編』（1967）でも仁和三年七月三十日に第3小海湖生成という説を記載している。その後、河内晋平（1983, 1995）がこの研究を進めて松原湖の生成年代が仁和三、四年であることを確定した。地震については未定であるが、大

地震があっても洪水被害があまりに大きかったために記載されなかったことも考えられる。何れにしても信濃に被害があったことは確実らしいが、それが地震によるものか、又それが仁和三年なのか四年なのかということとは不明である。

④ 元中の末（1390-1392）、信濃の地震

収集史料は1編で『増訂大日本地震史料、第1巻』（1941）の補遺欄に記載されている。史料名は『牛伏川砂防工事沿革史』である。昭和8年頃の工事の際に地元の伝承を収録したものと考えられる。この地震の解明には今後のさらなる史料収集が必要であるが、ここでは、この地震があったものとする。

⑤ 永享四年（1432）九月、伊那の地震

収集史料は1編で『熊谷家伝記』である。個人の家の断片的な記録を明和八年にまとめて伝記としたものであるが、他の地震の記事やこの地震の記事の内容から地震があったことは確かと思われる。被害の程度は不明であるが、このような記事から被害はかなりあったものとする。

⑥ 寛永四年九月十四日（1627/10/22）、松代の地震

収集史料は1編で『更級埴科地方誌1自然編』である。松代の地名や被害数量が記載されているが、一次史料ではないので、信頼性は低い。他の史料の収集が必要である。

⑦ 宝永四年九月二日（1707/9/27）、松代の地震

収集史料は1編で『弘化四年善光寺大地震』である。この記事の出典は『飯嶋家記抄』で松代の名や被害数量が記載されているが、一次史料ではないので、信頼性は低い。他の史料の収集が必要である。

この地震⑦と前項の⑥とは被害記事がほとんど同文である。また、宝永地震の史料にも同様の記事がある。九月四日の地震でその後十一月に東海道を別に大地震と記載

された史料もある。しかし、これらは一次史料ではない。宝永地震が十月四日でその前の九月上旬頃に 80 軒潰れるような地震があったような形跡は藩や幕府の記録には認められない。従って、⑥・⑦のどちらかが誤りかではなく、両者とも誤りで宝永地震だけではないかと考えられる。ここでは一応、⑥・⑦を二次史料の誤写としておき、さらに検討することにする。

⑧ 享保三年九月十二日 (1718/10/5)、飯山の地震

収集史料は 1 編で『月堂見聞集』である。伝聞を記載しているが、同時代のものであるから、地震があったものとも考えられる。他の史料の収集が必要である。現在ではこの地震の存否は不明である。

⑨ 元文二年閏十一月十三日 (1738/1/3)、信越国境の地震

収集史料数は 8 編であるが、新潟県内の史料が 6 編、長野県内の史料が 2 編である。長野県内のもので『飯山町誌』(1955)、『覚書(上田市柳沢家文書)』である。被害の記録は全史料の中で新潟県津南町の『芦ヶ崎村誌』(1962)だけで、新潟県津南町大字中深見字所平と長野県栄村大字北信字青谷に於いて家・蔵に潰・破損があったという『村役所用留』が引用されている。これらの大字の位置を示すため、明治 19・24 年に作成された『輯編二十万分一図』(『長野県の地名』平凡社刊の付録)を資料として添付した。両県の被害地はおよそ 11km 程離れている。長野県での史料の収集によっては詳しい被害記事が現れる可能性もある。

⑩ 寛延一年七月廿六日 (1748/8/19)、伊那の地震

収集史料は 1 編で『高遠城の局地型地震考』(1976)で、延享五年七月廿六日未の下刻と記載されている。記事は高遠城の破損である。同藩の記録は現在行方不明である。この他にこの年月日の地震記事は収録され

ていない。この地震より丁度 30 年前の七月廿六日未の刻に所謂「遠山川の地震」といわれる地震があり、この地震の史料を(参考)として本稿末尾の史料頁に収録した。高島城(諏訪市)までかなりの震動があったらしいが、高遠での被害詳細を記載した史料はまだ収集されていない。『高遠城の局地型地震考』にも 30 年前の地震は記載されていない。年号の誤記ではないかと考えられる。筆者の一人の見解では、この史料は誤りが散見される報告である。

⑪ 寛延三年六月廿三日 (1750/7/26)、松本の地震

収集史料は 1 編で『松本市史上』(1933)である。次項⑫の地震にも本文と同様の記事が収録されているほか多数の史料があり、本項⑪はその年号の誤りと考えられる。

⑫ 寛政三年六月廿三日 (1791/7/23)、松本の地震

収集史料は 8 編あり、被害地点は松本だけで、その史料は幕府の『雑事記』と『松本市史』(1973)で松本藩領の被害が記載されている。その他の史料は岐阜県・山梨県・群馬県・横浜市の体感記事である。局所的で強い地震と考えられる。

⑬ 寛政三年八月十六日 (1791/9/13)、信濃の地震

長野県の史料は 1 編で『永書』である。その他の史料は京都で地震を感じたというものである。『永書』は三井家の記録で、全国各地の出店からの情報を記録したもので、月日の誤りもないと思われ、信頼性は高いと考えられる。しかし、史料が 1 編だけなので何かの誤りということもある。他の史料の収集が必要である。

⑭ 文政一年(1818/) 長野県松川の地震

収集史料は『上高井郡誌』(1914)と『都住村誌』(1958)の 2 編である。『上高井郡誌』は大正 2 年上梓で、『都住村誌』はそれを引用して記載したものらしい。『上高井

郡誌』の記事を見ると、「天災地変」の項に 8 件の災害が次の順で列記されている。

「文政元年(1818 年、大地震)、延徳年間(1489～92 年、大水害)、寛保戊年(1742 年、大水害)、天明二年～四年(1782～84 年、飢饉)、天保五年(1834 年、飢饉)、弘化四年(1847 年、大地震)、明治元年(1868 年、洪水)、明治廿九年(1896 年、大洪水)」

この順序を見ると、文政元年だけが年代順でない。また文政年代ならばもっと史料が残っていると思われる。そこで筆者としては、文正元年(1466 年)のミスプリントではないかと疑いたい。字も似ていて、読みも似ている。次の年号が応仁であり、やがて戦国時代となり、1600 年の関が原合戦までは戦乱が続き、史料が多く失われたと考えられる。

この地震が実際にあったとすれば大きな地変であり、大山崩れか断層運動等による川の流路の大きな変更を伴っている。また、現在はこの地震から 500 年以上を経過していることになる。

国土地理院作成の『2 万 5 千分 1 地形図』を添付したが、これにも、『上高井郡誌』の記載の通りに集落の北部に破線で示した河川跡と思われる低地がほぼ東西に走っていて、山の崩落位置も存在し、松川の流路の変更は事実と考えられる。その年代が何時かは地形図で推定することは出来ない。これを確かめる史料または考古史料等がほしい。

本稿では、一応、文正元年としておく。

⑮ 天保四年九月廿六日(1833/11/7)、信濃の地震

この地震の長野県の史料は 1 編だけであり、それも平成十年に発行された『増訂大日本地震史料・日本地震史料・新収日本地震史料の正誤表』(1998)では同年十月廿六日の地震の記事の混同とされている。今回この史料の原文を検討したところ、この史料

『後車の戒』は全てが見聞記事の集合体で所々に編者の体験が「(頭書)」として挿入されている。この地震の記事として収録されているのは 3 部分で原文では別の個所である。第 1 部分は「(頭書)」で編者が大阪での体感を書いたもので、原文では九月廿六日と十月廿六日の 2 地震の記事が並んで記載されている。『新収日本地震史料』では、九月廿六日と十月廿六日の両地震の項に分けて、それぞれ収録されている。第 2 部分は見聞記事で、その内容の津波被害は本稿末尾の史料欄の(参考)の史料と比較して、明らかに十月廿六日の地震津波の記事であり、月の記載を誤ったものである。第 3 部分は体験・見聞記事で、或る僧侶が江戸から帰京する際に信濃路を通り、その時に遭遇した地震の強さを帰京後に話したものである。旅行中のことで月を誤ることはまず無いこと、また十月廿六日の地震は山形県沖の地震で津波は大きい、その震動は信濃路ではそんなに大きいはずはないことから、この記事は九月廿六日の地震記事と考えられる。従って他の大阪・京都・奈良付近の地震史料 6 編(本稿では不収録)と共に震源は信濃路(ここでは木曾路か)と推定される。しかし、第 3 部分の記事の真偽は不明である。新しい確実な史料の発見が望まれる。

⑯ 天保十二年十月廿七日(1841/12/9)、信濃の地震

収集史料は 3 編で、被害記事は『小野家文書、暦』の「天保十二年丑曆上段書入れ」に御制札場東方の石垣の崩れ、石夜燈屋根落下などが記載されている。この史料は信頼性が高い。この他の史料は、上田市の『井沢篤之進日記』と新潟県清里村の『暦史』で、いずれも体感を記載している。これらも信頼性は高い。従って長野市付近の小さい地震と推定される。

⑰ 嘉永一年二月廿八日(1848/4/1)、長野の地震

収集史料が10編あり、長野県の史料はそのうち3編であるが2編に被害記事が記載されている。それらの被害は、『永井可保日記』に横山辺で瓦落下、『松林家日記』に戸倉町羽尾で16軒潰、更埴市八幡北ほりで物置1ヶ所と記載されている。その他の場所では、諏訪で大地震、糸魚川・柏崎・高田・近江八幡・秩父で地震となっている。従って戸倉付近の地震と推定される。この年代になると史料数が多く地震の存在は明らかである。

⑱ 嘉永五年十二月十七日(1853/1/26)、長野県北部の地震

収集史料は12編であり、そのうち長野県の史料は6編あり、いずれも被害が記載されている。長野県内の被害は松代領で大きく、居家潰26軒・半潰15。その他の被害が幕府への報告に記載されている。新潟県内でも妙高高原町と清里村で被害があった。体感の記載は、上田市・新潟県糸魚川市・山形県大井沢村で地震、富山県氷見市で小地震である。従ってこの地震は潰家が長野県更級郡・水内郡と新潟県中頸城郡であることから、長野よりやや北方の山地と考えられる。この年代になると史料数が多く地震の存在は明らかである。

⑲ 安政五年四月五日(1858/5/17)、諏訪の地震

収集史料は1編で『大沼氏記録』である。大沼家は現在の駒ヶ根市赤穂にある神社の家で昔からの地震の記録が残されている。この記録もその中の一つであるが、当地の地震被害ではなく、上諏訪で3-4軒潰れという記事で、出来れば諏訪の記録が欲しいところであるが、一応この地震はあったものと推定する。

§ 3. まとめ

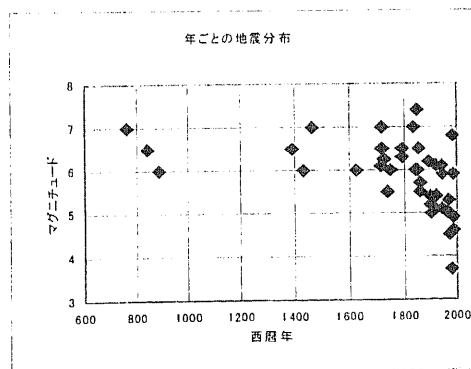
以上、長野県下の史料が20点以下の地震

の検討結果を述べた。これを踏まえて、長野県下に震源のある地震の一覧表を第2表として示した。削除した地震(最終列が「×、×」になっているもの)や、年代の変更された地震も検討結果にしたがって記載してある。

この研究は元来、長野県民への啓蒙の一つとして古地震および被害の真偽の議論を通じて、新しい史料の発掘がいかに大切であるかを訴えて、史料の収集に協力していただくことを目的としている。しかし、この調査の結果、①従来、文政元年と考えられていた地震が、文正元年であることがほぼ明らかになった。②疑わしい場合はいわゆる「史料集」にたよらず、その原典まで遡って調査する必要があることが判ったのは大きな収穫である。

また、明治以降で長野県に震源のある地震の概要を第3表に示した。この表を見ると精度の向上によるものと思われるが、小さい地震が多く含まれている。

さらにこれらの地震の年代を横軸に、M(推定を含む)を縦軸にとって地震を記入した図を作成して第1図とした。歴史時代には年代によって長期にわたって地震のない期間があるが、これは地震がないのではなく、史料が欠けているためと考えられる。また、近年には小さい地震が著しく増加している。



第1図

長野県は、「長野県西部地震」のような局所的な地震が多い県であり、それらも一旦地震が起こればそれなりの被害があるものと考えられる。今回のように史料は少なくてもかなりの被害も伴っている歴史地震もあるので、注意が肝要と考える。

⑰・⑱の地震では震度地点が比較的多いがその他の地震については史料の収集が必要であり、今後努力したいと考えている。史料の調査収集について地元の各位のご援助をお願いする。

文 献

‡ 文部省震災予防評議会(編), 1941, 増訂大日本文部省震災地震史料, 1~3, (株)鳴鳳社復刻

‡ 武者金吉(編), 1951, 日本地震史料(上掲の4相当), 毎日新聞

‡ 東京大学地震研究所(編), 1981-1988, 新収日本地震史料, 1~5[及び各別巻], 日本電気協会

‡ 東京大学地震研究所(編), 1989, 新収日本地震史料[補遺及び同別巻], 日本電気協会

‡ 東京大学地震研究所(編), 1993-1994, 新収日本地震史料[続補遺及び同別巻], 日本電気協会

荒川義則, 1980, 仁和3年(887年)信濃北部の地震に対する疑問, 気象庁地震観測所報告, 1, pp. 11-14

飯山市公民館(編), 1955, 飯山町誌, 飯山市公民館

宇佐美龍夫, 1996, 新編日本被害地震総覧[増補改訂版 416-1995], 東京大学出版会

宇佐美龍夫(編), 1998, 増訂大日本地震史料・日本地震史料・新収日本地震史料の正誤表, 日本電気協会

宇佐美龍夫(編), 1998-1999, 『日本の歴史地震史料』拾遺[及び同別巻], 日本電気協会
江口善次, 1954, 太田村史, 太田村史刊行会
上高井郡教育会(編), 1914, 上高井郡誌, 上高井郡教育会

上高井郡教育会(編), 1999, 長野県上高井郡誌(復刻版), 千秋社

河内晋平(1983)「八ヶ岳大月川岩屑流」, 地質学雑誌, 89, 3

河内晋平, 1983, 八ヶ岳大月川岩屑流の¹⁴C年代, 地質学雑誌, 89, 10

河内晋平, 1995, 松原湖(群)をつくった888年の八ヶ岳大崩壊, 信州大学教育学部紀要, 83

国土地理院(編), 二万五千分一地形図, 中野西部・中野東部, 国土地理院

鷹野一弥, 1965, 松原湖湖沼群の生成年代の考察, 信濃, 17, 11

津南町教育委員会(編), 1962, 芦ヶ崎村誌, 津南町教育委員会

新津亨, 1967, 小海町志, 川東編, 小海町志刊行委員会

平凡社地方資料センター(編), 1979, 長野県の地名, 平凡社

松本市役所(編), 1933, 松本市史上, 松本市役所

松本市役所(編), 1973, 松本市史上, 名著出版

森山茂夫, 1973, 太田の歴史, 太田小学校統合50周年記念実行委員会

著者不明, 後車の戒(浮世の有様), 日本庶民生活史料集成, 12, 三一書房

第2表 長野県下で起こった歴史被害地震(検討後)

検討地震	史料数	番号	和暦	グレゴリオ暦	経度、緯度、M	地名	被害概要	検討結果
①	3	9	天平宝字6/5/9	762/6/9	137.0-138.0, 35.5-36.5, M $\geq$ 7.0	美濃飛騨信濃	被害不詳、罹災1戸に2石下賜	○
②	2	14	承和8/	841/	138.0, 36.2(C), M $\geq$ 6.5	信濃松本か	壺屋倒壊、当時の国府の松本の地震と考える	○
③	16	---	仁和3/7/30	887/8/26	不明、参考：荒川義則(1979)	信濃北部	大山崩れ河溢れ、家人馬流出多し	△
④	1	---	元中の末	1390-1392	不明、暴風雨によるか	信濃	「大地震山津波」、松本付近に400×450mの大山崩れ	○
⑤	1	---	永享4/9/	1432/	不明、	伊那地方	神原村湯島大地震、幅1.5間長23間の地割れ	○
⑥	2	不採用	文政1/	1818/	都住村誌	長野県松川	大地震で川の流路変わる。地震発生年の変更	○
⑦	1	---	寛永4/9/14	1627/10/22	138.2, 36.6(B), M=6.0±1/2	松代	家屋倒壊80、死者あり。宝永地震に同様記事あり	×
⑧	1	---	寛永4/9/2	1707/9/27	不明、	松代	家中町家80余倒壊【飯島家記抄】、宝永地震の誤か	×
⑨	23	159	正徳4/3/15	1714/4/28	137.85, 36.7(B), M $\approx$ 6.1/4	信濃小谷村	大町より糸魚川沿いに被害、山崩・潰家多し	×
⑩	75	163	享保3/7/26	1718/8/22	137.9, 35.3(B), M=7.0±1/4	伊那、三河	遠山川より飯田にかけ山崩多数	△
⑪	1	---	享保3/9/12	1718/10/5	不明、	信濃飯山	城ならびに民家大破、疑わし	△
⑫	29	169	享保10/7/7	1725/8/14	138.1, 36.0(B), M=6.0-6.5	伊那高遠諏訪	高遠城石垣等大破、高嶋城内外も崩れ・破損多し	○
⑬	8	178-1	元文2/閏11/13	1738/1/3	138.7, 37.0(A), M $\approx$ 5.1/2	信濃国境	青倉村で家蔵大分損、新潟県津南町で潰家など	○
⑭	1	---	寛延1/7/26	1748/8/19	不明、	伊那地方	高遠：城破損、史料1点のみ、No.163と同一か	×
⑮	8	212-1	寛政3/6/23	1791/7/23	138.0, 36.2(B), M $\approx$ 6.3/4	松本	城の塙・櫓・石垣等、諸士居宅・百姓家・士蔵崩れる	○
⑯	4	---	寛政3/8/16	1791/9/13	不明、	信濃	15日夜の大地震で家よほど崩れる「永書」のみ記載	△
⑰	7	不採用	天保4/9/26	1833/11/7	後車の戒	信濃路？	信濃路は殊に(略)、山崩れ岩飛び樹木倒	○
⑱	3	243-2	天保12/10/27	1841/12/9	不明、	信濃	前札場の石垣一部崩れる	○
⑲	765	248	弘化4/3/24	1847/5/8	善光寺地震	信濃北部	長野を中心として甚大な被害	○
⑳	10	251-2	嘉永1/2/28	1848/4/1	不明、	長野地方	横山で家の瓦落ち、羽尾村で潰家16軒という	○
㉑	12	252	嘉永5/12/17	1853/1/26	138.1, 36.6(B), M=6.5±1/4	信濃北部	善光寺石塔・夜灯大半倒れ、松代領で潰家・山崩あり	○
㉒	51	271	安政5/3/10	1858/4/23	137.9, 36.6(B), M=5.7±0.2	信濃大町	大町組で家・蔵の潰あり、山崩れ多し	○
㉓	1	272	安政5/4/5	1858/5/17	不明、	諏訪	上諏訪で家3-4軒潰れる、「大沼氏記録」のみ	○

注：第1列は第1表の検討番号で、上から検討後の年代順に並べてある。

第3列の番号は宇佐美(1996)『新編総覧』の地震番号で、それに収録されていない地震は「不採用」とした。

第4、5列はそれぞれ和暦、グレゴリオ暦による地震年月日、第6列は震源要素、第7列は地震(又は被害)の地名、

最終列は検討結果で、左は地震の有(○)無(×)を、右は被害の有(○)無(×)を示す。

又、△は不明を示す。何れも一応の判定である。

第3表 長野県下で起った近年の被害地震

番号	和暦	西暦	経度、緯度、M	地名	被害概要
289	明治19/7/23	1886/7/23	138.5.37.05 (A), M=5.3	信越国境	野沢温泉とまる、水内郡岡村で家屋土蔵倒潰他
297	明治23/1/7	1890/1/7	137.95.36.45 (B), M=6.2	犀川流域	東聖山、西青具峠、南生阪村、北虫倉山の範囲で被害大
319	明治30/1/17	1897/1/17	138.25.36.65 (A), M=5.2	長野県北部	松代から小布施までの千曲川沿いの田畑で噴砂泥
319-1	明治30/1/17	1897/1/17	138.3.36.7 (A), M=5.4	長野県北部	11時間26分後の地震
339-1	明治33/7/25	1900/7/25	138.33.36.80 (), M=5.0	長野県仁礼	同村で石垣崩壊、土地小亀裂
391	大正1/8/17	1912/8/17	138.25.36.4 (A), M=5.1	長野県上田	土地の亀裂数ヶ所土塀石垣崩壊6ヶ所
418	大正7/11/11	1918/11/11	137.88.36.45 (A), M=6.1	長野県大町	南池田町、東岸川、西高瀬川の居宅全潰6、半305
418-1	大正8/3/29	1919/3/29	148.4.36.9 (A), M=5.4	長野県北部	野沢温泉とまる、石垣崩壊、便所倒潰など小被害
496	昭和16/3/7	1941/3/7	138.27.36.73, M=5.1, h=0	長野県中野	岩石土砂の崩壊あり
498	昭和16/7/15	1941/7/15	138.23.36.72, M=6.1, h=0	長野市付近	長野市北東の村々で死5, 傷18, 住家全壊29, 半115
504	昭和18/10/13	1943/10/13	138.08.36.77, M=5.9, h=0	長野県古間	家屋の半数復旧不能に破壊、道路亀裂土砂崩壊等
568	昭和40/8/-	1965/8/-	西寺尾～牧内のほぼ直線上	長野市松代	傷15, 住居全壊10, 半4, 全エネルギーM=6.4
585	昭和43/9/21	1968/9/21	138.27.36.82, M=5.3, h=10	長野県北部	県北で小被害, 傷2, 住家一部破壊224, 石垣損壊13
595	昭和45/4/9	1970/4/9	138.10.36.43, M=5.0, h=0	長野県北部	坂井村でブロック塀倒壊, 屋根瓦破損など軽被害
601	昭和46/11/10	1971/11/10	138.33.36.62, M=4.5, h=60	長野県北部	須坂市付近で壁に亀裂、落石など軽い被害
633	昭和54/3/2	1979/3/2	138.00.36.15, M=3.7, h=0	長野県松本	松本・塩尻で墓石の転倒・移動、棚の物落下(震度Ⅱ)
633-1	昭和54/3/2	1979/3/2	138.00.36.15, M=3.7, h=0	長野県松本	松本・塩尻で墓石の転倒・移動、棚の物落下(震度Ⅱ)
633-2	昭和54/3/2	1979/3/2	138.00.36.15, M=3.7, h=0	長野県松本	松本・塩尻で墓石の転倒・移動、棚の物落下(震度Ⅱ)
653	昭和59/9/14	1984/9/14	137.56.35.82, M=6.8, h=2	長野県西部	御岳山頂上付近から大崩壊、被害は主滝村が最大
656	昭和61/8/24	1986/8/24	138.33.36.32, M=4.9, h=4	長野県東部	丸子町・八日町で石積塀等崩落、震央位置に異論
657	昭和61/7/30	1986/7/30	137.93.36.64, M=5.9, h=3	長野県北部	被害1ヶ所：道路4、水道3、住居破損信州新町J187
666	昭和62/9/14	1987/9/14	138.49.36.99, M=4.6, H=7	長野県北部	野沢温泉村・栄村で墓石移動など軽い被害

注：第1列の番号は宇佐美(1996)『新編総覧』の地震番号である。

①「増訂大日本地震史料第一卷十七頁」

〔續日本紀〕二十四

天平寶字六年五月己卯朔、丁亥、美濃、飛騨、信濃等國地震、賜被損者穀家二斛、

〔越後年代記〕

五月九日 上越後大地震にて地折る、

〔新収日本地震史料第一卷七頁〕

〔善光寺緣起四〕「新編信濃史料叢書」▽

大風震動不破寺塔事

仁王四十七代大炊天皇御宇孝謙天皇 天平寶字六年壬寅四月二十四日 大風吹起大地震動 水内郡神社仏寺堂塔拜殿人民等之私宅 乃至樹木皆悉無殘破壞傾倒八十餘所也、而間諸仏像雖損亡 於善光寺精舍少無有破壞、故上自太上天皇下至田夫野人無不涕泣仰仰、御繁昌自上古至未來際 此仏菩薩威德不可稱計者也
(注) 五月九日の地震のことと思はれる

②「増訂大日本地震史料第一卷四十一頁」

〔續日本後紀〕+

承和八年二月壬寅朔、甲寅、信濃國吉、地震、其聲如雷、一夜間凡十四度、(續日本後紀) 塙屋倒頽、公私共損、
注 甲寅(八国)ノ報云ハ朝廷ニ列着シタル日ナレバシ

〔新収日本地震史料第一卷十一頁〕

〔千葉縣野田地方庶民災害年表〕

この地方地震あり、信濃大地震のため(続日本後紀)

③「新編日本被害地震総覧増補改訂版416頁1995」

026° 887 VII 26 (仁和3 VII 30) 申刻 五畿七道 $\lambda=135.0^{\circ}E$ $\varphi=33.0^{\circ}N$ (D) $M=8.0\sim 8.5$ [IV] 京都で諸司の舎屋および東西兩京の民家の倒潰多く、圧死者多数、津波が沿岸を襲い溺死者多数、とくに摂津の国の浪害が最大、同日3度余震、京都における8月中の余震回数は1日2回、2日3回、4日5回、5日6回、7・9・13・14・16・22・23日各1回、24日2回、28日1回、このうち5日の夜の地震が最大の余震らしい、[3]

— 887 VII 26 (仁和3 VII 30) 信濃北部
『扶桑略記』に京都の地震記事に続けて「信乃国大山類崩、巨河溢流、六郡城虛拂地漂流、牛馬男女流死成丘」とあるのみ、疑わしきか、
〔参考：荒川義則、1979、仁和三年信濃北部の地震に対する疑問、地震学会講演予稿集、No. 2〕

③「増訂大日本地震史料第一卷四十一頁」

〔三代實錄〕+

卅日辛丑、申時地大震動、經歷數刻、震猶不止、天皇出仁壽殿、御紫殿南庭、命大藏省立七丈幡二為御在所、諸司舍屋、及東西京廬舍、往々顛覆、壓殺者衆、或有失神頓死者、亥時亦震三度、五畿内七道諸國、同日大震、官舍多損、海潮漲陸、溺死者不可勝計、其中攝津國尤甚、夜中東西有聲如雷者二、

〔越後年代記〕

去年八月信濃國大地震に、火山を崩し、河溢れ、て當國川筋男女牛馬の死體流れて山をなす、

③「新収日本地震史料第一卷二十八頁」

〔類聚三代格十七 赦除事〕「信濃史料」二

詔。陶均庶類。本實覆載之功。司牧黎元。實賴皇王之化。故枯腊在容。大舜之憂勞弥切。群臣成病。伯禹之利導既深。伏惟「勞」先帝陛下。敬授人時。飲若天道。脩五紀之宜。考六官之化。將令陰陽無爽。災眚不生。積紅腐於京坻。驅蒼生於富壽。然而數鍾恒「得報」。金。理綿之期。予「震動」。雲興雖候其星。既遭懷憂。伊堯猶類其昏墊。去年七月卅日。坤德失靜。地震成災。八月廿日亦有天風洪水之沴。前後遭重害者州有餘國。或海水泛溢。人民婦魚鼈之國。或邑野陷沒。靡宇變蛟龍之室。呼嗟猶泥之功未成。象耕之期奄至。顧念辺陬。臨中懷。朕泰以薄德。不承洪基。內縹紗之帖之憫。多樹臨谷之危。重今月八日信濃國山類河溢。唐突六郡。城廬圯地而流漂。戸口隨波而沒溺。百姓何「事」。羣。頻罹此禍。徒免「坎」首之歎。宜降授手之恩。故分遣使者。就存慰撫。宜詳加賑。勸。優恤。其被災尤甚者。勿輸今年租調。所在閉。倉賑。給其生藥。若有屍骸未斂者。官為埋葬。播此洪沴之災。協朕納隍之心。主者施行。

仁和四年五月廿八日

〔扶桑略記廿一〕「信濃史料」二

仁和三年、七月卅日辛丑、申時、地大震、數刻不止、天皇出仁壽殿、御紫殿南庭、命大藏省、立七丈幡二、為御在所、諸司舍屋、及東西京廬舍、往々顛覆、壓殺者衆、或有失神頓死者、同日亥時、又震三度、五畿七道諸國、同日大震、官舍多損、海潮漲陸、(注)死者不可勝計、其中摂津國尤甚、信乃國、大山類崩、巨河溢流、六郡城虛拂地漂流、牛馬男女流死成丘、

○本書、信乃國以下ノ文ヲ仁和三年七月卅日ニ係ケタルハ誤ナルベシ(信濃史料)〔注〕

〔日本紀略前篇二十〕「信濃史料」二

五月八日、信濃國大水、山類河溢

〔小海町志川東編〕○長野県

〔長野縣松原湖沼群の生成年代の考察〕「信濃十七」

九百四十三頁補遺

ハ野火の起原 明徳(足利三代義隆)の時
 の大火を去る五百五十年の昔 年間
 知太實に於て斯の地の西側一帯が缺
 損し山つみを起したるを以て何ぞ堪
 へんや忍ちに於て内田、小池を初め
 して村井、小屋を押流し其餘勢に仰び
 て奈良井川を築き切りにて處く笹賀村神
 戸二子並に置れりといふ。

＊熊谷家傳記

一永享四年子ノ月大地震ニテ密村ノ内
 長谷原^{ハハノ}子ノ角ヨリ巳ノ方ハ長
 谷原^{ハハノ}ニ至リ
 二十二間割、堀一間半程ニ震割、村中ノ
 者大キニ驚キ騒ガ合ケル、此節伊勢浪人
 菅谷源太夫ト云者當村ニ住ルガ、此者
 八神部兩進共ニ能學ニテ其上占方毛梅花
 真影^{マカゲ}トテ惣テ奇妙之文者成故異ヲ由寄セ
 テ相尋ルニ火ノ王水ノ王ト申神ハ本地伊
 紫姫伊勢母尊ニテ男女之神也、此日ノ木
 ヲ産ミ給フ、去ニ依テ天照皇太神宮ヲ道
 引、鐵田彦尊トモ現ス、今ハ獨有テ江州
 志賀郡ニ鎮座シ王ト白發大神共兩部ニテ
 ハ庚申共奉禰、依而當村ノ鬼門ニ此御神
 ヲ勧請シ奉ルニ置イテハ、何之子細モ有
 間敷ト申ニ付、則十二神一字ノ小杜ヲ建
 立シテ祭リ初ル也、神威加類ニ依、其分
 ニテ震靜リ何事モナシ、依之原太夫ニ憑
 依ヲ遣ス、文曰ク
 一此度大地震數ニ當所可破之處、其方一
 心之思案ヲ以神慮ノ加護ニ預ルコト備
 二其方ノ働ニ依テ也、依之當所神社祭禮
 之規式向後其方可爲支配也、猶又住居之
 最可然處ニ見立、望ノ場所ニ可爲住居者
 也

〔弘化四年善光寺大地震〕

「勝峰家記抄」を見るに、今より百九十五年前、宝永四亥年九月二日、昼八ツ時、松代に地震ありて家中町家共八十軒余倒潰すとあり。這は、松代支庁の記事にて、他の被害少しも見えざるが、仮に松代町を中心とするも、蕨光寺平一円は、之が波動を受けて少なからぬ損害を被りしことなるべし。茲に注意すべきは、地震は、概ね夜中のみ震動することとなるに、これは昼の八ツ時震動したること也。珍らしとすべき歟。

去四日私城下信劬松城從未上刻申之刻迄大地震所々破損之覺

一城中小々堀破壊有之、家居別儀無御座候
一 家中潰家五軒
一 家中貳拾間、前後之表長屋三軒潰
一 家中拾間余之土蔵六軒潰
一 家中之間塀三百七拾四間倒
一 町潰家八百軒并半潰三拾貳間、其外小家藏等数不分明
一 寺貳ヶ所、廻廊貳十間、塀五拾間余倒并所々大破
一 城下家中、町人、牛馬共ニ怪我無御座候由申遣候、此已
後別条も御座候は追而可申上候 以上

十月七日

〔更級埴科地方誌 一・自然篇〕

寛永四年九月十四日 一六二七年十月 震域松代 家屋倒壊八十戸、死者あるもその数不明。

(武者註) 牛久川ハ長野縣松本市ノ東南一里半程ノ地、

⑧「増訂大日本地震史料第二卷二百九十四頁」

〔月堂見聞集〕

九月十二日ノ風雨、伊勢路ハ殊外甚敷、藤堂和泉守殿御領地、ニヶ所高沙ニテ損亡、求海道筋モ所ニヨリテ甚敷候、猪俣山風雨故損ジ、關東御下向之堂上方、近衛右府殿、様井殿、三日御逗留、此外八人之御方は、御跡ヨリ御下向哉、一日宛御逗留ナリ、信州飯山ノ邊ハ大地震ニテ、御成井民家迄大破損之由、松平三之助殿御領志州鳥羽、九月十二日之大風ニテ、高沙捕込、御領内殊外大破之由、

⑨「新収日本地震史料第三卷二百八十四頁」

〔水沢村史〕 ○新潟県

閏十一月十三日夜に地震あり、余震は十六日まで続いた。

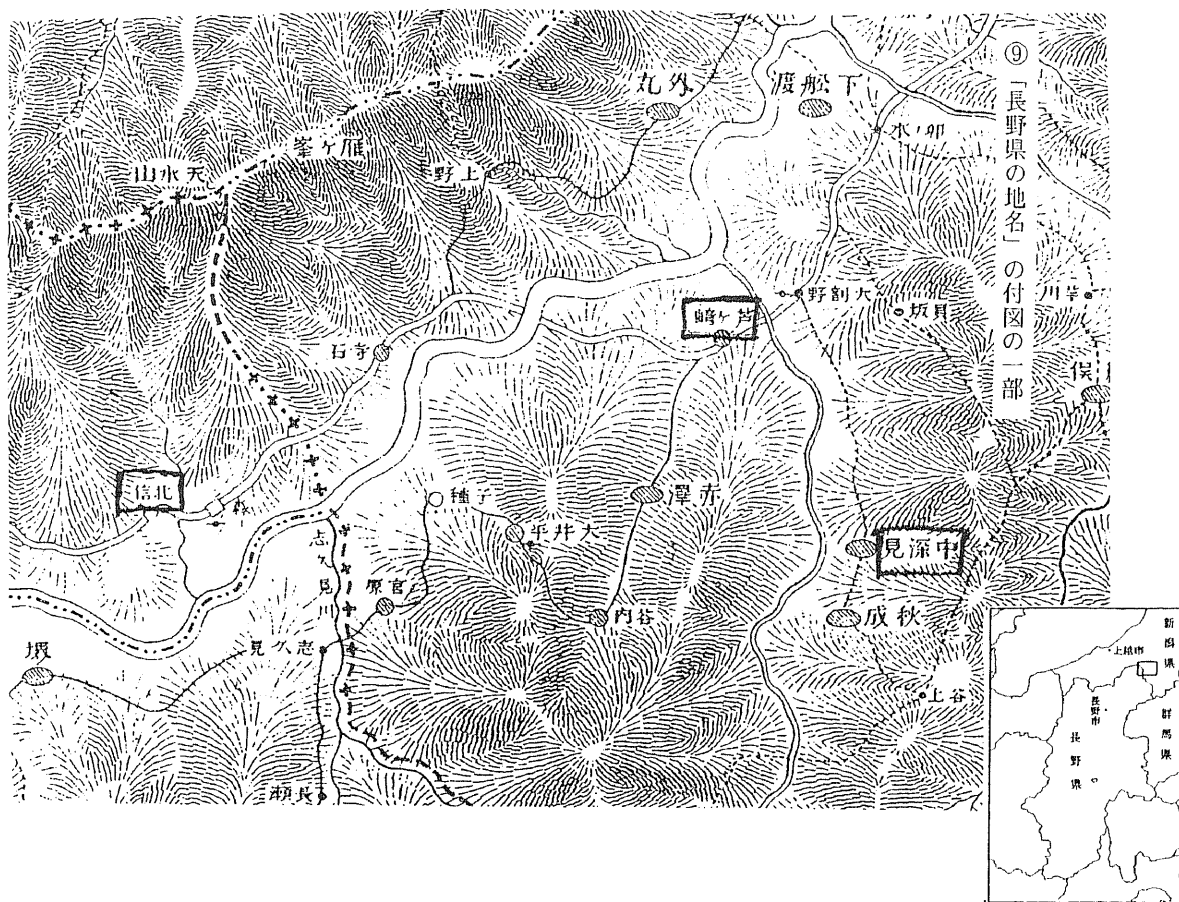
〔史料川西町の歩み〕 ○新潟県

閏十一月十三日夜に地震、余震が十六日まで続いた。

〔蘆ヶ崎村誌〕 ○新潟県中魚沼郡津南町

村役所用留

一元文式巳年閏十一月十三日夜四ツ時分当郡中大震入申候、是ハ三拾拾年以前正徳四年亥九月地震より殊の外つよく有之候十四日の朝迄に八十度余入申候十四日にも七八十度も入其夜も六七十度も入申候其暮より翌三四日間迄も段々入申候得共次第にすけなく相成申候東山所平杯ハ入崩屋敷近所の内背とろ出申由家も式三軒入潰し候由又信州青倉村杯も家も蔵も大分に損し候由此辺も家の内の金等入潰し蔵のかべ等入落し崩申候又十四日時分長岡辺入候由又小国谷へ閏十一月六日大地震入申由所々により定無之義に候依之十日町より仲右衛門殿専在谷中地震見分に被廻候



⑩「新収日本地震史料第三卷三百三十頁」

〔高遠城の局地型地震考〕○長野県

一七四八 延享五・七・二六 未下刻

地震強、御城破損、八月九日右地震につき、御城絵図半越太郎右衛門江被仰付

〔参考〕「新収日本地震史料第三卷百八十二頁」

〔諏訪高島城〕○長野県

享保三年一七にも石垣の修理があった（関川千代丸氏史料）。本丸の土戸門入口辺の石垣、高さ五尺横一間ほどが崩れ、天守と川戸門の間で石垣高さ八尺、横一間半ほどが崩れ、高さ八尺横二間ほどが孕んだ。関川氏の史料はこの年九月願出の扣書で、すぐ許可があったにちがいない。高島藩の場合はいつもすぐ許可されるのが例であるから。（注、城主忠虎の妻が松平中務大輔昌勝（越前家）の女で、家康の曾孫に当り、母は秀忠の女）

〔遠江国山住家文書〕○静岡県磐田郡本窪町
享保三戊戌年七月廿六日地震之事

一当社より領家地頭方より天流川通又遠山より高遠城迄木曾辺地震より申候寄夫極月迄ハ毎日之様ニ少宛々震申候
中部より西上方面勝坂より東江戸迄少震不申候別々無之候
当地道はし御宮拝殿之前石垣崩仕候

⑪「新収日本地震史料第三卷三百三十八頁」

〔松本市史 上〕

地震 寛政（延）三年六月廿三日夜五ツ時地震、行燈の火一時に消ゆ。夜中街上に露宿する者あり。本丸高堀北の方三十間倒る。町家土蔵の壁何れも亀裂す。此時越後及京大坂強震ありと伝ふ。同四年廿五日越後高田強震。
（注、日付疑わしきか）

⑫「新収日本地震史料第四卷二十頁」

〔雜事記 十四〕○国立公文書館

寛政三亥年六月倡濃国松平河内守領分大地震ニ付御届
寛政三亥年六月廿三日夜酉ノ刻より翌廿四日明ケ七時過迄打続大地震ニ而左之通

一 槽九ヶ所	一 巽馬場石垣廿八間
一 若宮通り三拾九ヶ所	一 同高堀同断
一 土手繩手石垣百六十八間	
一 大手見附橋巻ヶ所	一 土蔵廿八ヶ所
一 本丸儀蔵巻ヶ所	一 六拾九万儀蔵巻ヶ所
一 上ヶ土蔵儀蔵巻ヶ所	
一 上米町御用米蔵三ヶ所	一 諸士居室七拾九ヶ所
一 水戸曲輪巻ヶ所	
一 格式之者居室四ヶ所	一 無格給人居室六十三ヶ所
一 自分持蔵共八拾三ヶ所	一 在郷百姓家四百拾六軒
一 町家土蔵共八拾三ヶ所	一 井戸式百巻ヶ所
一 神社拾巻ヶ所	
一 寺院式拾三ヶ所	一 一井戸式百巻ヶ所
一 土蔵三百拾六軒	
一 死人未相知候	
用酒造本家	千物屋長左衛門 銭屋平左衛門 近江屋源左衛門 藤村 長右衛門 坂本屋権四郎 奥屋四郎左衛門 相模屋八左衛門 飯塚勘左衛門 山田屋八左衛門
右押崩申候先月廿三日酉ノ刻より同廿七日暮時迄大地震七拾九度程	
一 掛橋拾巻ヶ所	一 八茂瀬山
一 月籠山	一 殿主門八ヶ所
一 土城山	一 隠ヶ峰

右之通七月十五日御届有之候

〔松本市史〕○長野県

寛政三年六月廿三日夜五ツ時地震、行燈の火一時に消ゆ。夜中街上に露宿する者あり。本丸高堀北の方三十間倒る。町家土蔵の壁何れも亀裂す。此時越後及京大坂強震ありと伝ふ。同四年廿五日越後高田強震。

⑬「新収日本地震史料第四卷二十一頁」

〔永書 一二九〕○京都

〔八ヶ岳山麓の事〕
初甲州路惣而関八州何国も右五日六日之風雨大嵐在之由追々承申候殊而信州路去ル十五日夜大地震ニて家等余程打崩れ候由及承在候恐敷事共ニ候何卒此末世上穩にて何事も無之様奉祈斗二候

⑭「新収日本地震史料第四卷三百六十三、四頁」

〔上高井郡誌〕○長野県

文政元年大地震あり、松川は其以前中山田字中塩より、中村・馬場・矢崎の現在村落を迂回せしものなりしが、此地震の為に現今の流れに變じたり。

〔都住村誌〕○長野県

松川の石堤と水利組合

松川は本郡下第一の長流で源を万座山に発し笠ヶ嶽、横手、乳山、池の塔等の溪谷数多の細流を併せ更に樋沢川を呑んで西下し千曲川に流入する其間約三里に及ぶ。文政元年大地震があつて昔から松川・中山田の中塩から中村、馬場、矢崎などを迂回したのであつたが此地震のため今の流れに變つた。平時は何等の顧慮を要せざるも一朝霖雨連日に及ぶことあらんか濁流九天直下の猛勢を以て鋭え来り山壁を崩壊し泥土砂礫は勿論大石をも押流し橋梁は至る所破壊せられぎくなく沿岸崩れ損して慄然たるの状相に變するものであつた。斯のような荒川で水質は至つて悪く酸性が極めて多量のため河中の石は悉く濃度の茶褐色を以て染め尽され強力な生活力を有する昆虫さい生息することが出来ぬ程であるから鉄瓶鍋釜等鉄製の器具は其保存力極めて短かく忽ち腐蝕して用を為さざるに至る。

⑭「上高井郡誌（大正二年上梓）八百六十六頁」
第三十一章 雜

第一節 天 災 地 變

文政元年大脚震あり、松川は其以前中山田字中鹽より、中村馬場矢崎の現在村落を迂回せしものなりしが、此地震の爲に現今の流れに變じたり。

延徳年間千曲川沿岸の地、大水害を蒙る。されど其詳細を知る能はず。

寛保成年大水害あり。千曲川沿岸の地家屋流失し、田圃砂礫に埋みしこと、全反別の三分の一に及び、人民居るに家無く、食するに粟なく、皆飢餓凍餒に哭せり。

天明二年より同四年に至る三年間、氣候順を失ひ、雨天曇天多く屢々洪水となり。田圃居宅を害す、水害を被らざる地方も更に収獲なく、賣穀の禁制出で貧民特に飢餓を訴へ、或は家族離散し、或は道路に餓死す。領主救米を出すも足らず。富有の慈善家相謀りて貯穀を出し、救済せるも、終に盡盡き木實草根を食し、禾稈根芽餘すなきに至れり。漸く寛政に至りて快復せり。

天保五年、亦氣候不順にして收穫半年の半に及ばず。翌年に至り、甚しき不作となり、殆ど貯穀を盡す。其翌年氣候殊に不良、田圃の收穫なきのみならず、木芽伸長せず。草葉色を生せず。食糧悉く盡き甚しき飢饉となり。

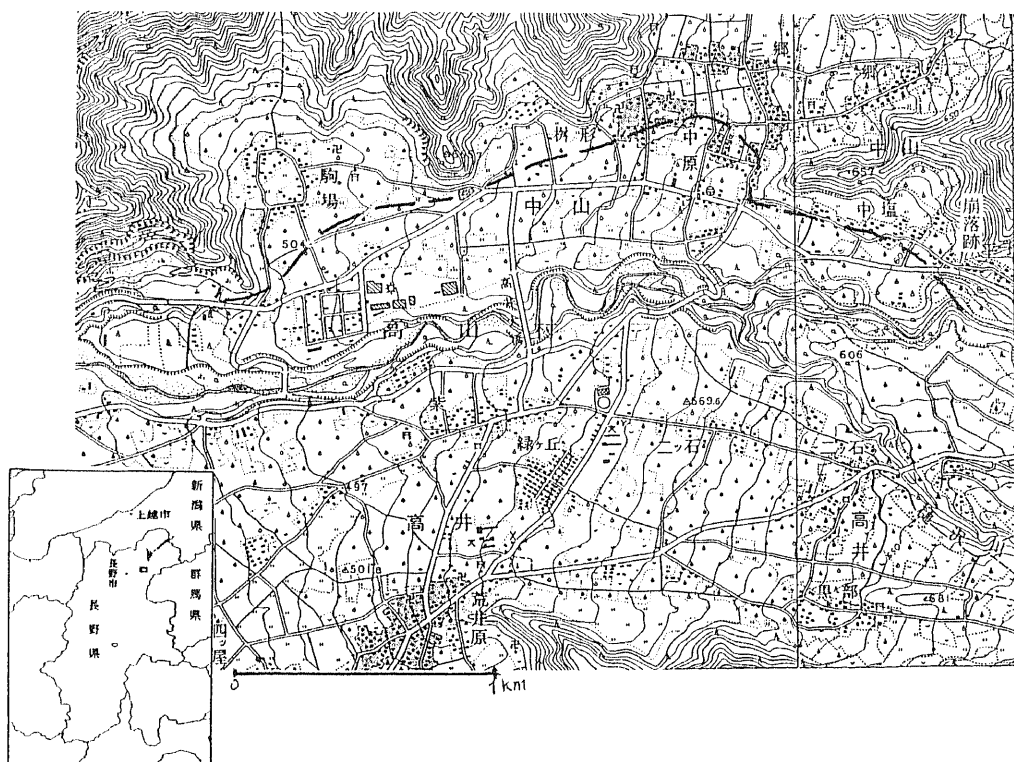
弘化四年三月廿四日午後十一時、俄然大地震起り、忽ち千曲川沿岸の地は家屋を倒壊し、水災起り、地裂け泥水を噴出し、井水瀧の如く湧き、大木折れ、山岳崩壊し、紫電白光閃き、慘狀驚ふるにものなし。何れも立退場を設けて之に居る。然るに震動連日止まず。滿一ヶ月間九百廿四回に及び。十二月晦日に至るも、尚三四回の震動を來せり。此震災に際し、虚空觀山、長百卅八間巾四十六間、深さ廿二間崩下し、原川に押し出し、土砂盤石堆積すること、長さ百八十間高卅二間にして河水更に來らず。信濃大地震山梨川塞滿水圖）爲に北安曇郡山内路村邊に逆流し、東筑摩郡生坂の地籍を浸し、凡十餘里の間一大湖水となり人家を浮ぶ。潜水廿日間、即ち四月十三日午後四時頃に至り、堆積せる盤石一時に缺潰し、洪水激突水深二丈余の濁浪となりて奔流し、人家を漂はし、堤堰を破壊し、溺死するもの多く、田圃は地沼に變せり。此際の被害凡左の如し。

沿岸一帶の地水冠り、村山台二十軒の村にて六十九軒押流され、溺死十八人に上り。綿内十三軒潰れ斯く六千石の地は荒れ果てぬ（弘化四年地震出役届書及同聞書）

明治元年、洪水沿岸の地、堤防破壊し、居宅浸水床上多きは二尺余寸に及び、田圃を荒せり。同十五年八月、洪水家屋浸水す。同十八年、旱千曲二川溢る。家屋浸水三尺余。

明治二十九年七月廿日、大洪水あり。是れより二日前雨降り始め、漸次其量加はり來り、前夜より廿日朝にかけ恰も盆を覆すが如き、暴雨となりて、千曲川を始め、松川市川赤野田川保科八木澤川結川百々川沿岸の地、被害多大にして明治年間に於ける第一の災害なりとす。概況左表の如し。

⑭「国土地理院二万五千分一地形図」〔中野西部〕〔中野東部〕



⑮「新収日本地震史料第四卷六百九頁」

(後車の戒) ▽

(頭書)

九月廿六日 午刻大地震ニ、申刻小二戌刻中ニ、寅刻小二

九月廿六日越前大地震能登の海辺三里計津浪押し来り、人家数百軒人死は其数をしらす、和島といへる処尤甚しと云。此辺惣て漁をなす、此日魚の網にか、れる事山のこづく、是を引上る事もなりかたき程の事也しに程なく津波にて大變に及びしといへり。

九月の地震信濃路は殊にきびしく振ひしかは、大勢の見物道路家に居余り山上に登り、或は岩上に立樹上に登りしか、大に驚きて騒動す。山崩れ岩飛ひ樹木倒れ、是為におし潰され偶死を逃れて逃んとするも大勢に踏倒されて死傷の人其数をしらすと云。

(参考)「新収日本地震史料第四卷六百九十五頁」

(鳳至町住吉文庫文書)(略)

右輪鳴町索麵御冥加銀、年々上納仕候処、当月廿六日の津波ニ而家財物置等皆潰致流失候者共之内、前段の通當時極難波仕迷惑至極ニ奉存候、依而奉恐入候得共、御冥加銀之内百八匁御慈悲を以当年一作御用捨被為成下候様奉願上候、尤四拾貳匁之分、異変無御座者共早速取立上納可仕候、為其紙面を以御款奉申上候 以上

天保四年十月

輪鳴鳳至町肝煎 与十郎

⑯「新収日本地震史料第四卷七百八十五頁」

(小野家文書「曆」) ○長野県

(天保十二辛丑曆上段書入れ)

十月廿七日夜 大地震ニ而二天前御制札場東之方石垣五六人指計之石崩ル其外御境内之石夜燈屋根落崩る

⑰「新収日本地震史料第五卷四十六頁」

(永井可保日記) ○長野

廿八日 曇り明六ツ過地震 随分大驚 横山辺に而は瓦等震ひ落し候由夜分三度少し宛 昼七ツ時より天気廿九日 曇り 四ツ時より雨降 夜分地震少し宛三度

⑰「新収日本地震史料補遺九百九頁」

(松林家日記) ○長野県更埴市稲荷山

二月廿八日 朝六ツ半時大地しん

羽尾村ニ而家數十軒潰

八幡北はりニ而物置卷ヶ所

⑰「日本地震史料(武者金吉)七百三十二頁」

☆「大沼氏記録」 ○信濃上伊那郡赤穂村

四月五日の地震奥筋強く上諏方にて三四軒家潰れ候由。

(参考)

☆「大沼氏記録」 ○信濃上伊那郡赤穂村

安政五年三月十日、朝四ツ頃地震、七ツ頃少々揺り、夕方六ツ頃又揺れる。

⑱「新収日本地震史料第五卷九十九頁」

(日記 御留守居方) ○松代
(寛永六年) 真田宝物館

三月十三日 同断

左之通御用番主水殿も認御出来御下ヶ有之

私在所信州松代去子十二月十七日午刻過地震強水内郡更級郡之内村々居家物置土蔵潰半潰怪我人茂有之其上山中筋山抜崩或は地裂耕地江砂等押出候場所茂有之尤城内并家中屋敷城下町等別条無御座段先御届申上置候処山中村々深雪之場所故其砌見分行届不申追々雪解罷成候間見分差出為相紀候処山中筋耕地ニ至候而は雪消兼候場所多分有之候上地裂之耕地は水氣多相籠居此上如何可相成哉難見極耕地損高之儀は收納之上可申上候得共村々居家等破損之覚

- 一 居家潰式拾三軒
 - 一 同半潰拾五軒
 - 一 同大損九軒
 - 一 物置潰式拾棟
 - 一 同半潰四棟
 - 一 土蔵潰三棟
 - 一 同半潰老棟
 - 一 堂潰式ヶ所
 - 一 郷藏潰式棟
 - 一 山抜崩大小式百拾ヶ所
 - 一 道形地裂破損延長九百三拾間余
 - 一 宮半潰老ヶ所
 - 一 大小橋落損四拾五ヶ所
 - 一 圧死
 - 一 牛馬怪家無御座候
- 右之通御座候此段御届申上候 以上
- 三月 真田信濃守